も，寺廟や家庭での道教的な祭祀である。父系に基づく魂の救済制度は，父系を血統的に継承しない者を救済する責務も負っており，父権は権威と責務の両側面を持つと言える。[2)]

事実関係の把握や固有名詞の表記および訳語についても，検討を要する箇所がある。独立後の政治リーダーの例（p. 48）として注16で林文慶に触れている（p. 91）が，林は1957年に他界している。コピティアム（p. 137）の「コピ」はマレー語に由来するため，一般的にはcopitiamではなくkopitiamと綴る。Legislative Councilを立法府（p. 230）や立法審議会（p. 237）と訳しているが，訳語は統一すべきであろう。華語新聞*Lat Pau*の華語表記を『叨報』としている（pp. 237–238）が，正しくは『叻報』である。Secretary of Stateを国務大臣と訳している（pp. 239–240）が，イギリスでは省の長たる大臣を国務大臣と総称し，海峡植民地総督に対応する国務大臣は通常植民地省大臣であり，本書の植民地長官にあたる。

本書で示されるデータや事例は，強い国家という視点のなかに回収されているが，それとは異なる，より多角的にシンガポールをとらえる視点を開いていく余地も残しているように思われる。

（篠崎香織・北九州市立大学外国語学部）

参考文献

三尾裕子．1990.「〈鬼〉から〈神〉へ——台湾漢人の王爺信仰について」『文化人類学』55(3): 243–268.

————．1997.「中国福建省閩南地区の王爺信仰の特質——実地調査資料の整理と分析」『アジア・アフリカ言語文化研究』54: 151–193.

篠崎香織．2013.「継承と成功——東南アジア華人の『家』づくり」『地域研究』13(2): 149–175.

田村慶子．2000.『シンガポールの国家建設——ナショナリズム，エスニシティ，ジェンダー』東京：明石書店.

田中恭子．2002.『国家と移民——東南アジア華人世界の変容』名古屋：名古屋大学出版会.

2) シンガポールの華人にとって，魂の救済を父系の継承に依拠しない方法を選択することももちろん可能である。このことに関して映画を題材として論じたものとして篠崎［2013］を参照。

志賀市子（編）．『潮州人——華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類学』風響社，2018，420p.

本書は日本では初の「潮州人」について正面から論じた意欲的な論集である。「潮州人」という存在／カテゴリーがそれぞれの移住地でどのようにしてたちあがっているのか／いないのかを明らかにしたものだが，残念ながら，この立場は執筆者間で共有されていたとはいいがたい。論文のいくつかは，どうしてもア・プリオリに「潮州人」をとらえているようにしか見えない立場から書かれており，論文集のそもそもの出発点はどこだったのかと，何度もまえがきと序章に戻りながら読まなくてはならない。

しかも「潮州人とはだれか」を問うことによって見えてくる答えはいくつもあると読者に予言しておきながら，最終的にすべての論考を読んだうえで読者が得るのは，津田他［2016］が循環論と呼ぶ罠にはまってしまっているのではないかという感覚である。著者によっては，櫻田［同上書］が方法論としての可能性を示した「行為中心的アプローチ」を模索しそれを実現しながらも，なおいくつかの論考では本質主義的語りの影が見えてしまうのである。全体としてはもっと人々の実践に愚直なまでに寄り添い，そこから「潮州人」がたちあがっているのかいないのか，その先を論じたほうが趣旨にそっていたのではないかと思われる。

ただし，編者の意図した次の3点は，本書において有効に機能している。3点とはすなわち1. 複数の地域における「潮州人」や「潮州文化」の比較，2. 歴史的視点の重視，3.「海外の華人コミュニティにおける中国性の維持・継承を検証することが自己目的化することを避けるため」（p. 24）に東南アジア研究者を加えることである。本書全体はこの3点に従ってよく構成されており，本書全体を通してこれまでの華僑華人研究アプローチに対する

自己批判が示されているし，歴史的視野が含まれたことで，「潮州」をめぐる語りが非常にわかりやすく，説得力のあるものとなっているといえよう。

本書の構成は大きく2部構成となっており，I部では中国，台湾とその周辺を，そしてII部では香港と東南アジアを扱う。構成は以下のとおりである。

まえがき　潮州人とはだれか（志賀）
序章　「潮州人」のエスニシティと文化をめぐって（志賀）

第I部　中国，台湾
第一章　宣教師が見た一九世紀の潮州人（蒲）
第二章　外の世界へ――一八五〇年から一九五〇年の潮汕における移民母村の女性（蔡）
第三章　台湾南部の潮州系移民をめぐるエスニック関係――陳氏一族の社会的経験（横田）
コラム①　潮州人と客家――差異と連続（河合）
コラム②　汕尾から考える「広東三大民系」（稲澤）

第II部　香港，東南アジア
第四章　潮州の「念仏社」とその儀礼文化――香港及びタイへの伝播と継承（志賀）
第五章　潮州系善堂における経楽サービスとそのネットワーク――マレーシアとシンガポールを中心に（黄）
第六章　ベトナムの潮州人宗教結社――ホーチミン市とメコンデルタ（芹澤）
第七章　タイ現代史の中の潮州系善堂――華僑報徳善堂の発展と適応（玉置）
第八章　海外華人宗教の文化適応――タイ国の徳教における「白雲師尊」像の変化を事例として（陳）
第九章　功徳がとりもつ潮州善堂とタイ仏教――泰国義徳善堂の事例を中心に（片岡）
コラム③　潮州劇について（田仲）
あとがき

序章は，本書全体を貫く問題意識，背景，本書の概要を示す。「エスニシティと文化という観点から潮州系移民をとりあげる」（p. 22）とあるところで，すでにア・プリオリにエスニシティと文化がとらえられており，猛烈な違和感があるが，各地で異なる歴史的・社会的コンテクストにおいてどのように「潮州人」という存在がたちあがってくるのかを明らかにしようとしたという意図は明確に示されている。本章では，地理的な「潮汕地域」と潮州系移民の歴史を語ってから，本書の概要でかなり詳しく各章の概要を示し，それが本書のなかでどのような役割を果たしているのかを示す。

I部は歴史研究から始まる。蒲の一章は19世紀以降にシャムに入り始めた宣教師たちの記録から，「潮州人」のイメージがどのようにして愛想のよいものから残忍なものに変わったのかを明らかにする。歴史的資料が語るのは，西洋人が本格的にこの地域に入りだした1850，60年代は，潮汕地域において村落間の対立と武装化が進み，地域社会が無秩序状態に陥って，人々が過酷な生存競争にさらされており，そのために住民の行動も変化したことなのであった。

蔡の二章は，移民を送り出した側の社会の公共領域における女性の役割と地位をめぐる歴史的研究である。大量に移民を送り出した潮汕地域においては，男性の送金による資本が流入し，女性がそれを運用し，港湾都市の発達が女性の参与を許容する新職種を生み，海外からの情報がメディアによってもたらされた。これらはこの地域における女性たちに従来の中国社会の女性が置かれた立場よりもより力強い立場，大きな役割を与えたが，同時に彼女らの足かせともなり，結果的に社会構造が根本的に変化するまで女性は公的領域への進出が阻まれていたのだという。

続く三章で横田は，潮州府にルーツを持ち，自らを台湾社会において「客家」とは異なるものと位置付ける人々の言説を追う。冒頭で丁寧にエスニック・グループに関する理論の整理をしたのち，当該コミュニティのおかれた歴史的，社会的コンテクストを丹念に読み解き，そこからエスニック・グループの立ち上がる様とその立ち上がり方，展開を明確に示す。そして本章には重要な点がある。当該の人々は「『我々は潮州人である』とも述

べては」いないという指摘である（p. 143）。これは読者に対し，「潮州」を求めているのは実は読者あるいは研究者ではないのかと自戒させるものである。

続くコラムは，「私にとって潮州文化は，もはや生活の一部」（p. 153）と語る河合のものである。潮州と研究対象である客家の双方の参与観察から，その差異と共通性を検討し，潮州のエスニック・マーカーとして使われがちな言語，住居，信仰などが，必ずしもそうならない場合もあることを示す。そのうえで「潮州人」とはなにかを問うのだが，河合は「潮州人」を単純にエスニック概念，地域概念と語ることも難しいといい，「もともと同じ地域の住民であり連続的な文化的要素をもつ両者が特定の社会政治的な背景のもとで潮州人／客家に分化していった過程を，より丹念に捉えていくべきだ」（p. 163）と述べる。さらに言説のヘゲモニー構造，すなわち言説が生み出される過程における権力―表象のメカニズムにも考察が必要であると主張する。

続くコラムは稲澤による「潮汕人」の考察である。汕尾地域は，話者のおかれているコンテクストによって，「潮汕」に含まれたり含まれなかったりする地域で，「マイナー」地域であると稲澤はいう。「『潮汕』という概念で指し示すことができるものはそのコンテクストや定義自体で大きく揺れ」（p. 174）「こうしたそもそもきちんと分類できないもの同士を組み合わせたものが『潮汕人』という概念」（p. 174）なのだという。さらに最後になって「潮汕人」と「潮州人」を同じものとして論じてきたが，それも場合によっては区別される場合もあると述べる。つまりあらゆるカテゴリー名，グループ名とはア・プリオリには語りえず，それぞれに一定の複数のイメージがあり，それらを無意識に組み合わせることによって，おかれたコンテクストごとにグループの姿が浮かび上がっているのだということを指摘するのである。

II部は志賀による香港の潮州系「念仏社」の儀礼による論考で始まる。河合のいうエスニック・マーカーであるところの善堂とそれを支える思想は，どのような社会的状況と歴史から生まれてきたのか，またこれらが移住先でどのように実践，継承されてきたのか。志賀は死者供養儀礼と音楽の分析を通じて「潮州式の儀礼」の標準が存在することを明らかにし，それを持続的に供給し，維持するトランスナショナルなネットワークの存在がそれを支える一端であることを示す。そしてそれこそがエスニック・マーカーとしての善堂の姿を形作っている一方で，そうでない場合もあることを指摘し，現地社会の文脈における善堂の実践の読み解きは，今後の研究課題とする。

五章の黄が論じるのは，マレーシアとシンガポールの善堂の「繁栄」の要因たる葬儀サービスの独自性と「潮州人」のカテゴリーの形成・維持との関係性である。宋大峰信仰を中心として形成された「慈善文化」の実践団体である善堂は，信仰と組織性，慈善の理念を兼ね備えた独自の集団形態を持つが，「潮州」という郷土性が維持され，「潮州的文化」が明示的に示されているために，「潮州系華人」の共感を得られやすい存在になっており，文化サークルとして機能するようになっているのだという。さらに善堂が行う葬儀サービス，功徳儀礼は可視的な潮州楽器，音楽と直接結びつき，「潮州人」のエスニシティを喚起する装置であるともいい，これらの習得に関する善堂間のネットワークは，地域を超えたひとつの儀礼文化圏の姿を見せると指摘する。

六章は芹澤による論考で，ベトナムにおいて統計的に示すことができない「潮州人」の存在がどのようなものであるのかを会館の活動と宗教実践から論じたものである。ベトナム南部社会においては「潮州」の名前を掲げた会館や宗教結社の慈善サービス，特に葬送儀礼や民間音楽は，「潮州人」の枠を超えて広く受け入れられているという。その一方，世代を経るごとに華人アイデンティティが薄れゆくなか，「正当な潮州文化」（p. 278）がホーチミンという華人文化が顕在化した都市から地方都市へと広がる必然性はないともいい，扶乩などの復活も含めて，今後の変化に注目する必要があることを指摘する。

七章の玉置の論文は，同化が進んでいるといわれるタイにおける華人の実践を，100年にわたる潮州系善堂の経緯から社会的文脈の中に位置づけようとしたものである。志賀が序章で「上座仏教

徒が多数を占めるタイ社会に，中国潮州地域から移民とともに異質な善堂の文化が入ってくるというように，タイ宗教と中国宗教を対置させる構図」(p. 45)「中国宗教のタイ宗教（社会）への適応という中国宗教側の視点から描かれている」(p. 45) と述べるように，基本的には善堂という組織を既定のものとして執筆されている。最終的には善堂がタイ社会の中に受け入れられつつあり，調査対象とした善堂がもはや「典型的」な潮州系善堂といえるのかと疑問を呈すのだが，タンブン（積徳）という概念を同様に用いる九章の片岡の論文と対比させた際に，どうしてもア・プリオリに「潮州」を想起しているように見えてしまう。

八章はタイにおける徳教の「白雲師尊」像の変化を追った陳の論考である。「白雲師尊」の姿は潮汕地域における創建期の徳教では道士風の風貌であったが，これがタイのベトナム系大乗仏教寺院の一角で祀られるようになったさい，仏教の僧侶姿へと変わったという。これは合法的な地位を獲得するための，徳教の信徒たちによる「策略」であり，文化的調整であるという。そしてこれが「華人の民間宗教の核心的な要素」(p. 345) を保つ役割を果たしたのだと解釈する。

九章の片岡論文は，「タイ」や「華人／潮州」あるいはタイ仏教と中国系宗教というカテゴリーを棚上げしたうえで，タイで行われている人々の宗教実践を分析したものである。片岡は，功徳という概念を手掛かりとして人々の信仰実践を見つめると，善堂はタイ仏教システムにおける雑多な諸実践を行う各種団体の一部を形成しているにすぎないということを明らかにし，これまでに想定されてきたタイ仏教と中国系宗教の並列という考え方を間違いであると断言する。そしてさらに，功徳という概念そのものに注目すると，我々が従来自明視してきた宗教概念の見直しが必要となり，そこで重要視されるのが，中国研究モデルなのだと指摘する。華僑華人研究的アプローチによる限界を指摘し，それを仮想敵としながらも，一方的にそれを批判するのではなく，二つの研究モデルのはざまを行き来しながら，人々の実践を理解する必要があることを指摘する本章は，二つの研究モデルを橋渡しし，その間をつなぐことでより深い理解が可能になることを読者に気づかせてくれる。

本書の最後は田仲のコラムで，潮州文化とはどのようなものであるのかの一端を，潮州劇を事例にして述べたものである。しかし残念ながら，本書において志賀が提示した「潮州」に関する問題意識が共有されていたとは言い難いように思われる。ゲストとして寄稿していただいたとはいえ，編者から，もう少し問題意識の共有があったほうが本書の意図に沿ったものになったのではないかと思う。

実は本書を初めて目にした時，「潮州人」というとてもダイレクトなタイトルにかなり驚いた。というのも，筆者はシンガポールでの調査において早い段階で「潮州」の壁にぶつかっていたからである。様々な場でなぜ人々が「潮州」を強烈にアピールするのかを理解できなかったのである。だからこそ，本書はそれに応えてくれるものなのかとの期待と驚きをもって手に取ったのであった。

では結果はどうだったのかというと，確かに本書は答えの一端を見せてくれていた。そのことにほっとするとともに，一方で行為中心的アプローチに取り組もうとした各著者の無意識に忍び込む認識・感覚は，どのように努力しても記述のなかに影を落とし，ある種の本質主義的語りを生むことになるのだという事実に愕然としたのも事実である。河合はそのコラムの最後にいう。「潮州研究は，潮州人をア・プリオリに捉えるのではなく，そのカテゴリーの生成について，より一層議論を深めていく時にきている」(p. 164)。この指摘はすべてのカテゴリー，分類をめぐる研究にあてはまることである。それがエスニシティではなく，ネイションやほかの概念であっても同じである。本質主義批判としては定番になりきったこの語りが，本書以外にもたびたび登場することを考える時，われわれはいかに本質主義を乗り越えるのが難しいのかを思い知らされるのである。

（伏木香織・大正大学文学部）

参考文献

津田浩司；櫻田涼子；伏木香織（編）. 2016. 『「華

人」という描線――行為実践の場からの人類学的アプローチ』東京：風響社.

東江日出郎.『フィリピンにおける民主的地方政治権力誕生のダイナミクス』耕文社，2017，276p.

本書は，1986年のマルコス政権崩壊後の民主化と分権化の中で，伝統的な政治ボスやパトロンとは異なる背景を持つ政治家が首長の座についたミンダナオ南部のジェネラルサントス市における政治権力の様相を分析した研究である。著者の東江氏は，1999年以降8年前後にわたって現地における調査を断続的に実施した。本書は，その成果をまとめた博士論文をもとにフィリピン地方政治研究の新たな進展も反映させて執筆された。

本書は「はじめに」と結章を含めた全6章から成る。そこで，まず各章の内容を概観しよう。

「はじめに」では，著者の問題意識と研究方法が提示される。従来，フィリピンの地方政治はパトロン―クライアント関係や政治マシーンを基盤にエリートによって展開され，汚職や不正が横行していると言われてきた。しかし，1986年以降はNGOや住民組織（PO）などの「非伝統的社会勢力」（p. 12）が拡大し，政治家に対するロビー活動にとどまらず，自らの理念や政策実現のために公選職ポストに独自候補を擁立する運動も展開しはじめた。この試みは必ずしも十分な成果をあげていないが，政策や理念を掲げて民主的な選挙運動を展開する勢力が台頭し，その中から地方政治権力を獲得する者が出たことは，フィリピンの政治的発展に大きな意味を有すると著者は強調する。著者はこのような認識のもと，これまで十分に議論されてこなかった「民主的政治権力」（p. 14）誕生のメカニズムを分析することを目的に，ジェネラルサントス市を対象とし，現地の政府関係者，住民，NGO，民間企業関係者等に広く取材を行い，資料を収集して分析を加えた。同市は1980年代後半から90年代にかけて，「民主的地方政治家」（p. 15）が2度にわたって首長に選出されており，著者が設定した問題を解明するのに最適の事例であった。

第1章では，これまでのフィリピン地方政治研究を「社会―文化的アプローチ」「国家中心主義的アプローチ」「それなりのガバナンス論」に分類し整理する。

「社会―文化的アプローチ」には，互酬性を規範とする経済的社会的な上位者と下位者の間の全人格的社会関係（パトロン―クライアント関係）の重要性を指摘する議論や，近代化や都市化の中で共同体意識が希薄化した社会において，「道具主義的な紐帯」（p. 42）によって組織され，選挙での政治的支持の獲得を主な目的として機能する政治マシーンの存在を強調する議論が分類される。

これに対して，国家資源の重要性を強調するのが，「国家中心主義的アプローチ」である。このアプローチには，国家と社会の関係における地方エリートの役割の重要性を指摘する議論や，政治ボスによる国家資源と強圧的な手段を用いた地方支配の実態を描き出す研究，政治マシーンやパトロン―クライアント関係の機能が限界に達した場合に国家資源を利用した暴力的支配が発生する点に注意を喚起する議論などが分類される。

最後が「それなりのガバナンス論」である。途上国では限定的な政策分野において「それなりのガバナンス」（p. 61）が展開されるとするメリリー・グリンドルの議論との類似性を著者が指摘するこの議論は，政治エリートにとってのパトロン―クライアント関係や政治マシーンの有用性，国家資源の重要性を否定はしないものの，彼らがこれらを用いて強圧的な支配や私的利益のためのレント追求に走るばかりではなく，地域の社会的，経済的発展に「それなり」に貢献していることを明らかにした。

著者は，以上のようにフィリピンの地方政治研究を整理したうえで，これまでは，「伝統的集票手段を用いず，政策や理念を基盤にした」（p. 73）民主的政治家を対象とした研究が少なかったことを指摘する。その上で，著者は，民主的政治家の例として1988年と1995年の2回の選挙で伝統的政治家を破ってジェネラルサントス市長の座についたロザリータ・ヌニェースを取りあげる。

第2章では，民主的政治家による地方権力の掌握が可能になった背景としての，アキーノ，ラモ